

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 25 日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25380923

研究課題名(和文) 思春期の自尊心低下の要因とそれを抑止する授業づくりの検討

研究課題名(英文) study of decline of self-esteem in puberty

研究代表者

加藤 弘通 (Kato, Hiromichi)

北海道大学・教育学研究科(研究院)・准教授

研究者番号：20399231

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、思春期における自尊心の低下と思考の発達の関係を検討し、自尊心の過度な低下を抑える授業を提案することにあった。そのために公立中学校、国立中学校の生徒約1900名を対象に、3年間9時点にわたる質問紙による縦断調査を行った。

その結果、(1)自尊心の変化パターンは中学2年次を底に低下し、その後は卒業に向けて上昇するU字カーブを描くこと、(2)中学入学時の思考の発達が進んでいる者ほど、その後の自尊心の低下が著しいこと、(3)思考の発達は短期的には自尊心の低下を引き起こすが、中長期的にはその過度な低下を抑止することが明らかになった。以上をふまえ中学生を対象に授業案を考え実施した。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to examine a relationship between a development of thinking and self-esteem in puberty. We designed a longitudinal study and 1,898 junior high school students was selected as our participants. We administered questionnaire that comprised scales of self-esteem and critical thinking disposition at three time points across three years of junior high school.

As a result of that, we found that the development of critical thinking disposition was a factor that cause a decline of self-esteem in short term, but was a factor that protect a excessive decline of self-esteem.

研究分野：発達心理学

キーワード：思春期 自尊感情 自尊心 縦断研究

1. 研究開始当初の背景

思春期に自尊心の低下が生じることは、これまで多くの研究によって指摘されてきた (Robins & Trzesniewski, 2005)。我が国でも都筑 (2005) をはじめとして、多くの研究が、同様のことを指摘している (小塩他, 2015)。こうした思春期の自尊心の低下の要因としては、これまで身体的要因 (Connolly, Paikoff, Buchanan, 1996)、学校移行といった環境的要因 (Wigfield, Eccles, MacIver, Reuman & Midgley, 1991) など様々な要因が指摘されてきた。その中でも発達心理学でもっとも広く知られている認知発達の要因として、思考の発達がある (Piaget & Inhelder, 1969)。しかし、これまで思春期における思考の発達と自尊心の低下を実証した研究はなされてこなかった。

2. 研究の目的

以上のことをふまえ、本研究では思春期の自尊心の低下を引き起こす要因として、思考の発達に注目し、自尊心の低下と思考の発達の関連性を明らかにすることを目的とした。また併せて、得られた知見より、自尊心の低下を防ぐために考えられる対応として、自尊心の過度な低下を防ぐために必要とされる思考の発達を支える授業の提案を行うこととした。

3. 研究の方法

- (1)調査協力者 国立中学校2校683名(男子325名,女子358名),公立中学校1,215名(男子619名,女子596名)。
- (2)手続き 平成22年度入学生に関しては1年間3時点・平成23年度入学生に関しては2年間6時点・平成24年度入学生に関しては3年間9時点,質問紙による縦断調査を行った。調査実施時期は,毎年6月,10月,2月であった。
- (3)調査内容 批判的思考態度(平山・楠見,2004),自尊感情(Rosenberg,1965)等に「あてはまらない～あてはまる」までの5件法で回答してもらった。学年・性別・学級のほかに調査協力者を一致させるために,生年月日と所属している部活動についてたずねた。また進級時にクラス替えがある場合は,前年度のクラスについてもたずねることで,各協力者のデータを一致させた。

4. 研究成果

(1)自尊心の発達のな変化
Figure 1 と Figure 2 は、国立中学校と公立中学校の生徒の自尊心の1項目あたりの平均を求め、発達のな変化を示したものである。ともに共通しているのは、①2年生を底に自尊心が低下し、3年生に上昇傾向に転じるということ、②多くの時点で性差がみられ、男子に比べ女子の自尊心が低いということである。

これまででも多くの先行研究で、思春期は

自尊心が低下すること、性差があり女子の自尊心の低下が著しいことが指摘されてきた (Robins & Trzesniewski, 2002, 2005; 都筑,2005)。本研究でも性差については同様の結果が得られたが、思春期の自尊心の低下については先行研究と異なる結果であった。つまり、先行研究では少なくとも中学3年間は低下し続けるとされていたが、今回の調査から3年生では上昇するという結果が得られた。この結果から国立・公立に限らず、またH24年度生にかぎらず、H22年度生、H23年度生のいずれにもみられる変化パターンであり、中学生の自尊心の発達は必ずしも一貫して低下し続けるというわけではなく、U字カーブを描くという可能性が示唆された。

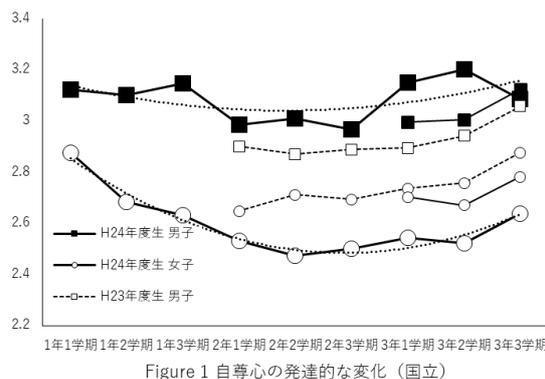


Figure 1 自尊心の発達のな変化 (国立)

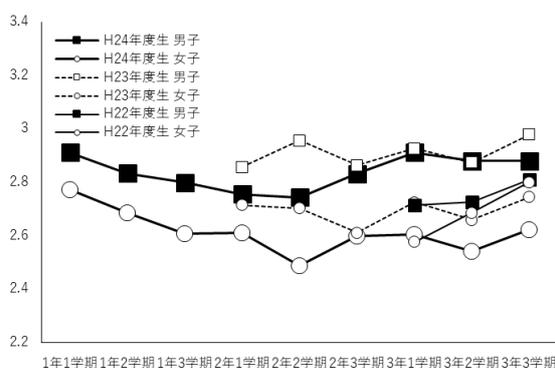


Figure 2 自尊心の発達のな変化 (公立)

(2)思春期の思考の発達と自尊心の関係

思考の発達と自尊心の低下の関係を検討するために、中学入学時の批判的思考態度の発達とその後の自尊心の変化パターンの関係を潜在曲線モデルで分析した。その結果、国立中学校のサンプル、公立中学校のサンプル双方において、批判的思考態度から自尊心の変化の傾きに対して有意なパスがひかれた。国立中学校においては論理的思考への自覚 (-0.042***) と客観性 (-0.031*) が有意であった。したがって入学時の批判的思考態度の論理的思考への自覚の得点が1点高いと自尊心が-0.042ずつ下がり、客観性の得点が1点高いと-0.031ずつ下がるということが分かる。なお同様の結果は公立中学校でもみられた。

これらの関係性をよりクリアに理解するために、中学校入学時の批判的思考態度の

得点によって、高群・中群・低群の3つに分けその後の自尊心の変化を示したのが、Figure 3とFigure 4である。図から明らかな通り、入学時点で思考の発達が高かった群は直に自尊心の低下が始まる一方で、低かった群には顕著な低下は見られなかった。

またもっとも自尊心が低下する時点（中学2年生の2学期～3学期）に注目した場合、思考の発達が高い群ほど、自尊心の低下が高い水準で止まっている事もわかった。

つまり、思春期における批判的思考態度の発達は、短期的には自尊心の低下を引き起こすが、中長期的には自尊心の過度な低下を抑制することが明らかになったということである。

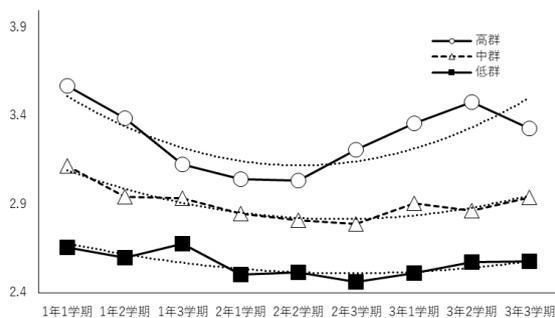


Figure 3 批判的思考態度の発達と自尊心の推移（国立）

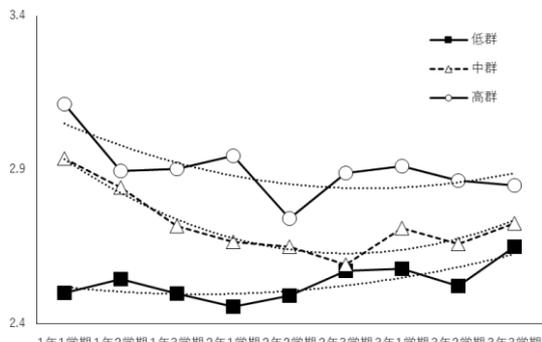


Figure 4 批判的思考態度の発達と自尊心の推移（公立）

(3) 自尊心の過度な低下を抑える授業

以上の縦断調査から批判的思考態度を涵養することが、中長期的には自尊心の過度な低下を抑えることに有効であると考えられた。そこで中学生を対象に、批判的思考態度の涵養にかかわる授業を行った。

具体的には論理的に考えるということと、客観的に考えることが、自尊心の過度な低下の抑止に関係していたので、中学生に自らの自尊心に関するデータを集団で分析してもらおうというテーマで授業を行った。



(写真) 実際の授業風景

中学3年生の3学級で自らの自尊心のデータを「1. なぜ思春期に自尊心は低下するのか?」「2. なぜ女子のほうが自尊心の低下が著しいのか?」等について集団で討議する形で授業を行った。その結果、授業後の感想からは、「思春期は悩むことに悩む時期」といった当初は出てこなかった思春期の自己に対する認識の深まりがみられたり、また「悩んでいるのは自分だけではないことが分かってよかった」といった感想が寄せられた。

1 回限りの授業であるため、その効果については限定的ではあるが、自らのことをデータに基づき客観的に分析したり、また自らの考えを論理的に他の生徒に伝えるという試みは中学生で十分可能であることがわかったことは、本研究の成果であった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計6件)

1. 加藤弘通・太田正義・松下真実子・三井由里 2014 思春期における思考の発達と自己および人間関係への影響：批判的思考態度についての縦断調査をもとに 子ども発達臨床研究, 5, 21-30.
2. 加藤弘通 2014 自尊感情とその関連要因の比較：日本の青年は自尊感情が低いのか？ 平成25年度 我が国と諸外国の若者の意識に関する調査（内閣府），119-133.
3. 加藤弘通 2014 「抵抗」としての発達支援 子ども発達臨床研究, 6, 35-41.
4. 加藤弘通 2014 思春期は「むずかしい」年頃なのか？ 季刊 保育問題研究（新読書社），263, 32-41
5. 加藤弘通・太田正義・松下真実子・三井由里 2013 中学生の自尊心を低下させる要因についての研究：批判的思考の発達との関連から 静岡大学教育学部研究報告（人文・社会・自然科学篇）63, 135-143.
6. 加藤弘通 2013 子どもの問題のなかに発達の可能性をみる 季刊 保育問題研究（新読書社），263, 154-180.

〔学会発表〕（計7件）

1. 加藤弘通 2015 道徳教育の目的は規範意識の醸成なのか？ 静岡大学道徳教育研究会, 2015年12月18日, ホテルアソシア（静岡県, 静岡市）
2. 加藤弘通・太田正義・松下真実子・三井由里 2015 思春期の思考の発達とその関連要因 日本発達心理学会第26回大会, 2015年3月21日, 東京大学（東京都, 文京区）
3. 加藤弘通・太田正義・松下真実子・三井由里 2014 思春期の思考の発達が自尊心の低下を招くのか？ 日本発達心理学会第25回大会 2014年3月22日, 京都大学（京都府, 京都市）
4. 松下真実子・加藤弘通・太田正義・三井由里 2014 中学生の自尊心への働きかけとその時期についての検討 日本発達心理学会第25回大会 2014年3月22日, 京都大学（京都府, 京都市）
5. 加藤弘通・太田正義・松下真実子・三井由里 2014 思春期の思考の発達が自己の発達パターンに与える影響：批判的思考態度と自尊心の関係を中心に 日本教育心理学会第56回総会, 2014年11月8日, 神戸国際会議場（兵庫県, 神戸市）
6. 太田正義・加藤弘通・松下真実子・三井由里 2013 中学生における批判的思考の発達とその関連要因 教育心理学会第55回総会, 2013年8月19日, 法政大学（東京都, 文京区）
7. 松下真実子・加藤弘通・太田正義・三井由里 2013 思春期の自尊心の発達を支えるための取り組み－3年間を通じた調査と実践に基づいて－ 第48回全国国立大学附属学校連盟養護教諭部会 サンポートホール高松（香川県, 高松市）

6. 研究組織

(1)研究代表者

加藤 弘通 (KATO Hiromichi)

北海道大学大学院教育学研究院・准教授

研究者番号：20399231

(2)研究分担者

太田 正義 (OTA Masayoshi)

常葉大学教育学部・講師

研究者番号：10635048